観音だより

岡山市東区西大寺中3-8-8
TEL(086)942-2058
観音会広報委員会発行
平成27年1月1日
題字カット　木村喬生

迎春

高野山開創一二〇〇年記念華展（華道高野山・大阪にて）

大晦日～元旦　0時～2時　うどん接待
元　旦　0時・10時・14時
2・3日　10時・14時　開運初護摩供奉修
1月14日　9時～　おかざりはやし

楽しい会陽行事

2月21日(土)　会　陽
2月22日(日)　後まつり
2月28日(土)　宝　来　春
3月1日(日)　宝来春・稚児行列
3月8日(日)　大柴燈護摩

幸せはここに

住職　坪井全広

お釈迦さまは『やがて死すべき身の、今日命あるは有難し。』と説いておられます。

私たちは時々、命の次に大切な物は？　という言葉を口にし、耳にします。何といっても命あっての物種ですから…

命とは生と死の狭間にあって、確実に後者に向かって歩んでいます。しかも「生老病死」の四苦に代表されるように、人生は苦に満ちています。

先人は皆、幸福を求め困難に立ち向かってきました。私たちも幸せを求めて懸命に精進し人生という旅を続けています。

ノーベル平和賞を受賞したダライラマは、人は皆、成就や幸福を探し求めて、それぞれ違う道を歩みます。誰かが人とは違う道を歩んでいるからといって、彼らが道に迷っているわけではありません、と著しています。

では、幸せとはどこにあって、どんなものでしょうか。しかも幸せは千差万別です。

遠く一千二百年もの昔、明快な答えを出した人がありました。弘法大師空海です。

『夫れ仏法遙かに非ず、心中にして即ち近し。真如、外にあらず、身を棄てて何くんか求めん。迷悟我にあれば、発心すれば即ち到る。明暗他に非ざれば信修すれば忽ちに証す（＊苦は形として存在するものでなく、自身の心の中に存在するものである。幸も不幸も、鬼も仏も、地獄極楽も全て各人の心の中にある。固く信じて修行すれば必ず望む境地に至る）』と説かれています。

弘法大師空海は中国から帰国後、時の都であった京都を中心に全国へ布教活動を展開されました。しかし、都の喧噪を遠く離れ、国と社会の安泰を永遠に祈り、多くの人々の幸福のために活躍しうる人材を育成したいという思いに突き動かされました。この地が、雄大な自然に抱かれた、深山幽谷の高野山でした。

平成二十七年は、この高野山開創一千二百年という大きな勝縁を迎えます。記念事業の一環として、四月二日から五月二十一日までの五十日間、弘法大師空海が残した大いなる遺産への感謝を込めて絢爛壮麗な大法会が執り行われます。そして次の百年、千年への新たな時代への扉が開かれます。

お揃いでお参りしましょう！

「日本の伝統と和文化の継承」
四季を愉しむお菓子をお届けします
岡山夢菓匠 敷島堂
0120-15-0059
【邑久総本店】瀬戸内市邑久町尾張1153-1　☎0869-22-0059(代)
【西大寺店】岡山市東区西大寺中野377-1　☎086-943-5151
菓子・お餅・お赤飯承ります　敷島堂　検索

西大寺店
(086)942-0111
あさ10時～よる20時
食料品売場のみ毎日9時開店
★電話番号をよくお確かめの上、おかけくださいませ。
HAPPY TOWN
天満屋ハピータウン

会陽の課外学習

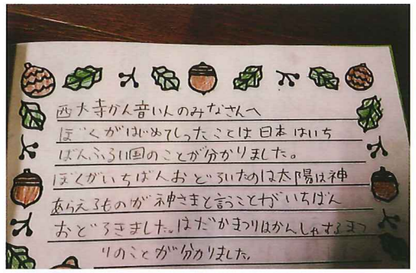
会陽も学校教育に…

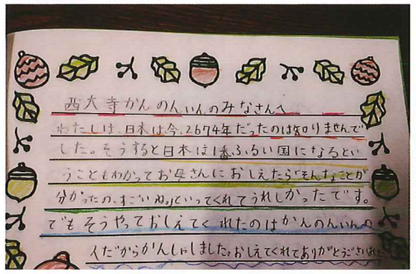
教育基本法の改正もあってか、近年、西大寺会陽が課外教育に取り上げられ、多くの小学校から先生の引率の下、学年単位で来訪されています。

当山では会陽を通じて命の大切さや、日本人が誇るべき精神性、伝統文化、歴史観についての醸成の糧になればと、情熱を傾けて対応しています。

それに応えて小学生の感想文を冊子にしてお寄せ頂きますが、拝読するうちに責任の重大さに、逆に気が引き締まるものがあります。

地域や関係皆様のご支援を得、先人の貴重な文化遺産「西大寺会陽」を、誇りをもって継承して行きたいと肝に銘じております。





高野山開創一千二百年記念

写経奉納のお勧め

平成二十七年は、弘法大師空海が高野山を開創されて一千二百年という大勝縁を迎えます。

これを記念し『高野山奉納写経』をお勧め致します。

奉納されたお写経は高野山奥之院 弘法大師の膝下に永遠に納められます（奉納料一千円）。

用紙は観音院本堂お守り所へどうぞ。

（毎月二十一日は 観音院下大広間で写経会があります）

編集後記

新年あけましておめでとうございます。

皆様には、良い年をお迎えのことと思います。昨年は年末に衆議院選挙で締めくくりこれから日本はどうなるのでしょうか？　明日に希望をもちたいものです。

今年は良い年になるように祈るばかりです。

今年の会陽の祝い主も決まり当日を待つばかりです。

新しい年が皆様の笑顔の多い年でありますように、お祈り申し上げます。

S・T

まごころ奉仕　株式会社 東部典礼
〒704-8176 岡山市東区富士見町 1丁目 28-1　Tel:086-943-8788
岡山典礼会館（百間川東隣）
〒704-8184 岡山市東区中川町 602-1　Tel:086-944-1444
k-toubu@smile.oc/n.ne.jp　弊社ホームページ：http://www.toubutenrei.com

cerema
株式会社セレマ
葬儀 法要会館
西大寺シティーホール
内勤スタッフ募集
住所　岡山市東区金岡西町 821-2
TEL 086-944-4440

墓地・墓石
石に心の祈りを刻む
㈱坂本石材(株)
岡山県瀬戸内市邑久町尻海4382-84
☎工場(0869)24-0622/☎事務所(0869)24-0285

いつまでも心に残るセレモニー
やすらぎ
まごころ　安心　低価格
株式会社 JA岡山
年中無休 24時間受付
■やすらぎ東会館　Tel(086)944-2800　岡山市東区西大寺中野377-6
■やすらぎ西会館　Tel(086)903-1194　岡山市北区撫川70-1

西大寺観音院 奉職者紹介

①氏名　②職務　③年齢
④在歴　⑤一言メッセージ

(1)①坪井　全広(ぜんこう)　②住職
③七十一歳　④四十六年
⑤後、半生、よろしくお願いします。

(2)①坪井　綾広(りょうこう)　②副住職
③三十八歳　④十四年　⑤一人でも多くの方にお参りして頂けるお寺にと、奔走しています。

(3)①坪井　禮子(れいこ)
②住職妻
③六十八歳
④四十四年
⑤寺に嫁して幾年月。あっという間に〝おばあちゃん〟

(4)①坪井　悦子(えつこ)
②副住職妻
③三十五歳
④六年　⑤子育て、邁進中！

(5)①上山　泰憲(たいけん)
②僧侶
③五十七歳
④二十七年
⑤御詠歌が少しできます。

(6)①國本　秀輝(しゅうき)　②僧侶
③二十九歳　④六年　⑤西大寺の海老蔵です。

(7)①木庭　仁(ひとし)　②本堂受付
③七十歳　④九年　⑤養毛剤の研究中です。

(8)①平岡　正道(まさみち)　②本堂受付
③七十七歳　④三年　⑤さわやかな、お参りめざし今朝も箒とる。

(9)①鳥越　冨士子(ふじこ)　②事務員
③七十五歳　④二十年　⑤カラ元気で頑張っています。

(10)①栗政　文子(ふみこ)　②事務員
③七十四歳　④十年　⑤紫式部？で働いています（意味が分からない方はお寺へどうぞ！）。

(11)徳聞(とくぶん)さん
(12)定興(じょうこう)さん
(13)①春都(はると)（長男）
(14)①滉典(こうすけ)（三男）　☆孝憲(たかのり)（次男）は保育園へ…
(15)①愛犬、パス太　③五歳

以上、お寺の為、日々精進しております。
今年もよろしくお願い申し上げます。

中国僧「日本文化を学びに…」

去る九月四日から十月五日までの一ヵ月間、二名の中国僧が来日。主として当観音院の修行僧として滞在されました。

一千四百年以上も昔、日本は先進的な中国の技術や制度等を学ぶため、遣隋使を派遣しました。隋から唐に時代が変わっても続けられ、持ち帰られた情報は日本に多大な影響を与えました。殊に仏教は日本人の感性の中で開花した部分が少なくありません。

当山と交流を続けている普陀山の重鎮であった佛祥法師は特命を受け、現在、寧波の古寺を復興中です。師は良き日本文化を取り入れたいとの強い願望があり、これが実現したものです。

短期間でしたが、真摯に日本の仏教文化は勿論のこと、衛生・礼儀作法・書道・茶道・華道など幅広く体験され、充実した日々であったと思います。

これに関わった私たちにも学ぶ事が多く、戸惑いの中にも刺激と喜びの日々でした。

離日に当たり、以下のメッセージがありましたので、ご紹介します。

「この度は私たち二名を受け入れて下さり、誠に有難うございます。

皆様の思いやりのあるおもてなしを一生忘れません。西大寺をはじめ受け入れをして下さった寺院で、私たちは、中国では既に見る事も、学ぶ事も出来なくなった、沢山の事を学ばせて頂き、特に日本仏教の繁栄と精進の心に感銘を受けました。有難うございました。

徳聞、定興　合掌」

“まごころ”
祈りある心豊かなくらしを求めて
株式会社 小林朱雲堂
西大寺店
〒704-8192 岡山市東区西大寺中野本町11-32
TEL:086-942-5559　saidaiji@syuundo.com
仏壇・仏具・墓地・墓石

オアシス霊園「西大寺東」好評受付中
創業明治22年　仏壇・墓石・霊園・寺院荘厳品
中原三法堂
nakahara
西大寺店　岡山市東区西大寺中1丁目1-3
TEL (086)942-1633　FAX (086)942-1639
ホームページ•http://www.sanpoudo.co.jp/

梵鐘二題

(1)除夜の鐘

住職　坪井　全広

四十四年間、欠かさず一人で除夜の鐘を撞いてきました。凛とした空気の中に響く鐘の音はまた格別で、自ずと心が洗われる思いです。

いつの頃からか、人間の心にある百八の煩悩を滅するため、大晦日には除夜の鐘が撞かれるようになりました。

煩悩とは、人の心を惑わせたり、悩ませ苦しめたりする心のはたらきの事を言い、これに因み、回数は百八回が一般的です。

ご承知の通り、当山の鐘は奇縁によって千年の昔に朝鮮からもたらされました。戦国時代には、戦の合図として用いるため武将によって持ち出され、ある時はヒビが入って全く鳴らなくなったと伝えられています。また、太平洋戦争時には国指定文化財であったため、供出を免れました。

定かではありませんが、重要文化財の鐘が撞き続けられている事例は稀ではないでしょうか。奇跡と、先人のお力で幾多の苦難を乗り越えた、日本の至宝の梵鐘を撞く事が出来るのは幸せです。

(2)招福の鐘(巫女さんから)

佐々江　裕子

巫女のバイトで入った際、拝観の受け付けに立つことがある。(拝観をされる方は鐘を打つことが出来る)ここでの仕事は、拝観券の受け渡しや牛玉所殿への案内、朝鮮鐘の撞き方の説明だ。

鐘は拝観入口を上がって右側の小窓から撞くことが出来る。これが、なかなかタイミングが難しい。

まず、小窓の下に垂れている綱を、鐘との距離を保ちながら(イチ・ニィ・サンのリズムで)振り子のように揺り引きし、最後のサン！の勢いで強く撞く。最後が弱かったり、手を離したりすると打ち損じ二度撞きになる。

珍しい撞き方の鐘で、撞くと福を得られる、と言われている。正月三が日に限り撞くことができる「招福の鐘」。ぜひ、体験して清々しいお正月を迎えていただきたいと思う。

カメラ雑学

観音(カンノン)と呼ばれたカメラ

キャノンは昔、精機光学研究所として昭和八年創立と言われています。

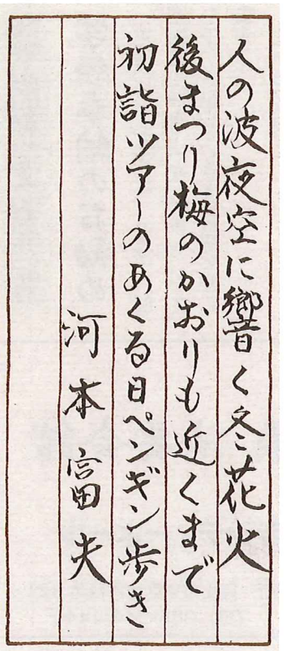
わが国最初のライカ(Leica)のコピー機を昭和十年に作りあげました。このカメラの名称がKwanon(観音)と呼ばれたカメラですが、試作にとどまり発売には至りませんでした。

Kwanonは観音に由来し、カメラ開発にあたった吉田五郎氏の命名によるとされています。

もう一つ驚くことは、Kwanon観音カメラに付いた標準レンズはKasyapa(カサパ)と称し、釈迦の十人弟子の一人(摩訶迦葉―摩訶は偉大の意)から名前を取っています。このように仏教名の付いた非常に珍しいカメラです。

もう一度、昔の様に観音と名前の付いたカメラを作って欲しいものです。

ちなみに現在のCanon(キャノン)は、Kwanonカンノンから始まりCannon(大砲)を経てnを一つ取りCanon(規準)になり、現在のキャノンに至っています。



仏壇仏具　卸・小売り・修理・墓石・ギフト
人とのつながりを大切に
株式会社 田岡仏壇店
〒703-8231　岡山市東区藤井259-2
TEL(086)279-1813　FAX(086)279-8110
http://www.taoka-butsudan.co.jp/

佛壇・佛具専門店
川西佛壇店
岡山市東区西大寺東2丁目5-11
☎086-943-7401

『会陽』

イーツァン・クワン

これは私が幼い頃に近所のオタキばあさんから聞いた話である。どこまでが本当で、どこからが作り事か分からぬが、少し前の時代にはこんなことがあったとしても一向に不思議ではない。

もう日暮れじゃ。いいかいタキちゃん、ようお聞き。わしが酔っぱろうておるからゆうて、酒臭いにおいが嫌かもしれんけど、まぁ、こっちへ少うしお寄り。あんまり大きな声で話をするようなもんじゃあねえ。ああ、トンボ捕ってきたんか。お前も男勝りなとこがあるのう。その気性ならこれからわしが話すことも怖がらんで聞けるじゃろう。そら、鼻が出とる。このちり紙で拭いとけ。まだまだ色気はなさそうじゃやのう。ほほほ。

そうじゃ、カルピス作っといたから飲め。最近の子はこれを喜んでよう飲むわ。わしらの頃はこんなもんありゃあせなんだ。子供にも—そうじゃ、その子供の話じゃ。

わしにゃあ子供がおらん。お前もその事はよう知っとろうが。実はな、おらんかったわけじゃあねんじゃ。本当は一人だけ息子がおったんじゃ。色の白い子でなあ。あんまり元気は良うなかった。生まれた時も少し目方が軽かったな。

それでもかわゆうてのう。顔はわしによう似とった。名前は近所のお寺の和尚さんに付けてもろうた。「徳明」じゃ。ぼっけえ賢そうな名前じゃろうが。わしゃあこの子が賢うなると信じとった。

ところがじゃ、やっぱり病気がちな生まれじゃったんじゃろう。七つになる前に急に調子悪うなってしもうた。わしはそのころ仕事盛りじゃ、徳明の事はかみさんに任せて仕事ばっかりしようたんじゃ。まあ、治るじゃろう、何とかなるわいと、のんきに構えとったんじゃな。

それが見てみ、子供の病気は早えで。見る見るうちに悪うなってしもうてからに、とうとう死んでしもうたんじゃ。わしが働いとる間のことじゃった。子供じゃけえ小さなお棺でのう、骨壺もこんなもんじゃった。

かみさんはわしをきつう責めたで。子供の死に水も取ってやらん父親がどこにおるか、言うてのう。それから間もなくじゃ、荷物まとめて出て行った。ああ、誰も止めなんだ。わしが悪いんじゃからの。仕事ばっかりしたところでどうにもならんゆうのに、戦後の貧困の中で日本中が一生懸命働いてとったんじゃ。そうゆう時代じゃったんじゃな。

いや、タキちゃん、そんなに恐い目をしてわしを睨まんでくれや。まだこの話の大事なところはこれからなんじゃから—。

それからわしはやもめになって、一人寂しく暮らしとったんじゃ。時代も変わってハイヤーの運転手になった。今頃は一家に一台、車があるんじゃろうけど、あの頃はみんな車なんか持っとりゃあせん。ちょっと荷物が多うて、遠いところにならハイヤーにも乗ったんじゃな。

稼ぎは良かったよ。ああ、苦労する事は無かった。まだみんなが乗っとらん自動車に乗れる喜びもあったわな。

それでな、その日もわしはいつものように車を西大寺駅の前につけとったんじゃ。いや、その日は特に忙しかった。何と言っても会陽の日じゃったからな。今でもそうじゃけど、会陽の日っちゅうのは、一年のうちで一番冷えるんじゃ。雪が降ることもようある。その日も寒かった。軽便鉄道から降りて、駅から観音院まではそんなに距離は無え。歩きゃ歩ける。じゃが寒いもんじゃから、ちょっとじゃけど乗せてくれゆうて、いつも以上に繁盛しとった。

さあ、十一時を回ったじゃろうか、宝木まで一時間くらいの頃かのう、若い男の者が乗り込んで来たんじゃ。聞けばやっぱり会陽に行くらしい。こりゃあ今日は会陽行く人しか乗らんな、と思いながら出発したんじゃな。

ところがその若者がまあ、色々と話をするんじゃ。運転手さんは歳いくつじゃ、とか言うから年齢を言うたら、そうかそんな歳なんかあ、とか言う。あんた、今日は会陽の裸に入るんか、と聞いたらそんなつもりは無えけど、祭を見とうて来たんじゃ。運転手さんいっしょに案内してくれんか、もう十一時もや。どうしようか迷うたけど、ゆうて言うんじ過ぎて次の汽車はもうありゃあせんから、まあええわと思うたんじゃな。

その若者を乗せて吉井川の河原まで走ってなあ、そこへ車は停めといてちょっとまあ、街の中を一緒に歩いたんじゃ。この日ばかりは大勢のお客さんじゃ。いやいつものようでえ。あの頃はみんな会陽に行ったもんじゃ。だいたいが好きな者は早うから酒を飲んで酔っぱらっとるわな。そのうちどこかで喧嘩が始まる。裸の中にも酔っとるんがおるで。いや、みんな飲んでから出てくるんじゃ。じゃあないと寒うてやっとれんがな。裸になって興奮状態、その上酒じゃろう、すぐに喧嘩し始めるで。

でまあ、そんな賑やかなところを歩いて行った。あのへんの商店街も当時は活気づいとってなあ、二階の窓には客がようけ見えたわ。博打をうっとる者も中にはおったで。泊りがけで見に来とる者も多かった。

わしらは二人で角の中華そば屋に入ってのう、そばとコップ酒じゃ。冷え切った体にゃ美味かったで。おでんがあったからそれも注文したんじゃが、若者はその厚揚げをじいっと見とる。どうしたんじゃと声を掛けたら、僕は小さい時に初めておやじにおでん屋へ連れて行ってもらったんじゃが、その時の厚揚げの味が忘れられんのじゃ、てな。父親が仕事ばかりで一つも一緒に飯を食いに外へ出ることなんか無かったんじゃそうな。一緒にご飯を食べることすら少なかったってな。それが、その日は珍しく知り合いが店を始めたから、ということで家族で出かけたんじゃそうな。そのおでん屋で食べた厚揚げの味が本当に美味しかったんじゃて。いや、厚揚げの味に感動したんじゃのうて、家族一緒に食事に行けたのが嬉しかったじゃ、というんじゃな。

そう言えばわしも家族で外食なんぞしたこと

がなかった。さっきも言うたがずっと忙しかったからじゃ。でもよう考えりゃ、面倒だったからかもしれん。自分一人では外で飲むことはあったからのう。もっともっとかみさんにも楽しい目をさせてやりゃあ良かった、徳明も一緒に連れて行ってやりゃあよかった、と後になって思うわな。

それで、そんな事を考えとったら、何だかその若者が自分の子供のように愛おしく思えてきてな。こっちも酒が進んだで。もう今日は仕事はこれでやめよう。あとはもうええ。事務所に電話しておけば許してもらえるじゃろ、今日はこの若者を自分の息子のように思うて酔うてみたい、と思い始めたんじゃ。

それもよ、ちょうど生きていたら、これぐらいの年齢の若者だったろうと思うし、こんな好青年ならどんなにか親孝行もしてくれたろう、と思うたら酒の回りが早うなった。それで四本目を頼むころにはすっかり酔うとったな。周りが見えんようになっとった。この若者に死んだ徳明の姿を映して、何とも言えん感慨にふけとったんじゃ。

他の客が観音院の方へ出発し始めたから、店の中も少のうなって、宝木ももう少しで投げられる時間になった頃、運転手さん、僕も出られるかな、と言うんじゃ。今日は見るだけのつもりで来たけど、何だか周りの雰囲気につられて出てみたくなった、と。そりゃあ、まわしは貸してもらえるから出りゃあええ、というこことになってな、貸してもらえるところまで行って、着替えたんじゃ。そこのおばさんが火打ち石で縁起もつけてくれたわ。まわしを締めたら、ええ男じゃ。体格もええ。

じゃがな、タキちゃん、わしが驚いたのはそんな事じゃなかった。

なんとこの若者、死んだ徳明じゃったんじゃよ。生き返ってわしに会いに来てくれたんじゃ。死んだ人間が会いに来る話やこ、とても信じれんのじゃが、そいつの背中にある大きなほくろ。それが徳明と同じ所に、同じ形をしてあったんじゃよ。

全くそんなこともあるなんぞ、わしも信じれんかった。一気に酔いも醒めてしもうた。まさかそんなわけがない、と動転した気持ちのまま、背中のほくろばかり見ながら後をついて行ったんじゃ。

大きなほくろのある背中は仁王門をくぐって、垢離取場へ入った後、わしの所へ帰って来て、言うた科白は—

父さんもう気付いたじゃろう。僕は死んだ徳明じゃ。僕が死ぬ時、父さんが忙しうて帰って来てくれなんだのを淋しゅう思うたよ。死んでからもその事が哀しゅうて、極楽へ往くことができんかったんじゃ。父さんを恨んどるわけじゃねえ。父さんだって仕事が忙しかったんじゃからな。それでも僕が死ぬ時には帰ってほしかったよ。親子なんじゃもんな。じゃからもう一度父さん会いとうて、成仏できずにおったんじゃ。

でも今日は会陽じゃ。備前平野にも春が来るんじゃ。いつまでも中有に迷っとったんじゃ、僕も苦しいばかりじゃ。いやあ、父さんに会えて良かった。話ができたし、一緒にお酒が飲めるなんて思いもせなんだ。おでんも美味しかったよ。もう忘れたんじゃろう。子供の時に父さんがおでん屋に連れて行ってくれた事。僕はまだ小さかったけど、あの日の厚揚げの味は忘れられんよ。本当に美味しかったよ。

今、垢離取場にも行って来た。俗世の垢も取って、いよいよ往生するんじゃ。会陽の日ばかりは本堂の上は極楽浄土になると言うから。裸に紛れて押し合いしているうちに往生出来るじゃろう。

—そう言うて、にこりと笑うて裸の群の中に入って行ったわ。何せ大勢の裸じゃ。初めのうちまだ姿が見えとったが、やがて裸の中に紛れていって、いつの間にやら見えんようになってしもうた。わしの目に涙が浮かんで、前がよう見えんようになったのもあったじゃろうがの。

最期のあいつの笑顔は今でも忘れられんよ。わしの胸の中にあったつかえも取れたように思うんじゃ。でも、こんな話しても誰も信じてくれんじゃろ、なあタキちゃん。大人というものは頭が固えからな。そんな作り話をしなさんな、と端から馬鹿にしてくれる。じゃが、本当なんじゃよ。誰でもええから聞いて欲しかったんじゃ。いや、ありがとう。

ありゃ？西の夕暮れ空が妙に明るいな。金色に輝いて見えらあ。どういうことなんじゃろうか。おお、こりゃあ観音様じゃ。西の空にお姿が見える。これでわしも極楽へ往けるとゆうことなんじゃろうか。

南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛—。

この話を私に教えてくれたオタキばあさんも二十年ほど前にこの世を去った。初秋の夕暮れに縁側に倒れた徳明の父親は、まるで眠っているかのような安らかな死に顔であったそうである。

※この作品は筆者のご了解を得て「咆哮」より転載致しました。